



上序

之兄其孝心生子之桑比

於也

安里市字成子然

公私如いふ満なりし

陸奥

其業以了果
生一己の如願
才如く志
先後におくも終よ
去年ハ仲秋
日

故人と生れ休る志
幾又譚佛系乃因
一
詠一
早行と請且何
お師よ

真亭

點一稱乃々此を以てしるす
小祥の忌辰は逢ふ
牌前々是は讀誦
之其魂魄とならざる事
と云ふ成ぬ
卯辰の事
于時々此七末と云ふ
其意は

序

夫能言をたらしむる事
詳く之を少はる事
や中何補乃多き事
山を々詳々多き事
栗汁禱奪する事

山

多し乃境之待之 彼祖公の日記
晋子之書指し 鑑之 夜中日深
後ある子 楚を 之 荀子 申る 母法
「是の 生 之 申 其 志 之 行
可 之 何 之 申 其 志 之 行
鶏 之 亦 復 よ 其 之 志 之 行

人 之 志 之 行 而 之 志 之 行

於 色 意 菴 旅 寓

二 峯 庵

壯 郎 題

天明 丙午 如月 廿

天

自天明五己年卯月八日

一夏百句

莫多太

要津寺權佛會

花所堂約流字もあお河

芭蕉翁喫茶會千句巻頭

とらふの十月十三日八日短行定

他者のかりひあきり 詞多此と

いづり乃ほとよむやけ日新茶

中身喫茶會と名づく

早稲田大学
文学部図書

教員図書
中村位定

45-10222

とををいふ世に巻あつては

九日

かみかみへは扇のちの音りか

十日

乾家や卯日そりの植木賣

安於桃多ノ家公ヨ百ノ序
よあしはれえ山王権現ノ
請へしちちふりむいし
かひいかにさあさ

禱踏し禱もたのふ裕らあ

法樂

東の百より 卯やちん子規

桃多ノ家公信彦卿苑あり

中よあふあけ君やりそつてい

標題

碓子真あるきすや百の亦立
時あつてさうさの言り

百并

十一日

中村勘三郎

市村羽太衛門故ありし以芝居よ
申す人形より振取他あり
古稀より生しし人の眼をより
こそしむ句の働も新ありお

口上

市川團十郎

取他入形より

山崎右次左衛門

相人 ある母
市川一

大將 人形

面より

浪をより

後と一
猿の馬具借り

所 かよあやむも 甲うか

廿二出之ハ芝居の蠟燭を
より教乃あを照したる

十二日

故流亭

君んよと松魚の水を灌

哥仙アリ下略

十三日

百詩

途の吟

天台乃仗僧も白雲社丹が

十四日

八丈海為朝明神用像
系詣

以海より信を織出し世に賞す

法 楽

夏引のちも神の弓弦りお

安社公より所頼登賛

鶴よりしれえ屋中李白の画子

軒百遍其のち夏ハ夜廻り

牛子あて布袋の月をる昼

世をりしとん母の松すし

十五日

題燕子花

二交りをも歌ひあはのち

十六日

百歩

すきものや昼ひさきの肘袖

十七日

若ものも乃昼餉のきこを

次飯平夏大根のかりり

十八日

千萬の乳母の親父着西より

なる麦一柿おま

妻よこころのさなかり

十九日 光懐

おのれと荀吟あつら

廿日

芥子の巻紙みり束の寝

廿一日

八方の孫北子習を

清書の麻衣養とて

廿二日

帯取へ呉る孫あり 更へ

北三日

多もあく若葉子志留の 細雨

北四日

夕げの古脊もあつちの 體

北五日

先師墓系

さ日のおもはれり地り 祀

北六日

連牛越前名産お系

卯の花よせし丹田 乃主世ん

北七日

麻布砂目亭

老のあす海ひ果立ああり
光のあすさく巻乃と

雨深し 若葉

黄のうそ老をいりせき みる

北八日 君魚子元父の需子意し

題 白麻

池もけきるより出るあめだりあ

阪路妙善寺梅年上人を
はあよ苗さし雨中を前め

あめを

芍薬も葉草品のひよら

北九日

乾坤盛の人へ文母り駿府へ
藤ふ鶴さし保川木場何り

別荘まへ興行を前め水き
湯三つの橋をわたり新樹あり
あひして夏をむくいと上る情く
其日の題池流りく其あり

大和物語 芦刈人 月守

源氏の借 あらくめ 白麻

池のし草 白ひあまの 完本

池の物語 あくめ出流 父母

変換く 君の源氏 あり

通水町 笠もく 故流



枕草子

ひびきのりし三駱

伊勢の語

芥川 遙知

能狂言

墨畑の女 彭亨

且素舟

あはれの唄 沙羅

琴の唱

越天乐 方壺

日本書紀

莢多太

便チ以テ礮テ馭リ盧嶋ヲ爲シ国ニ中カ之ニ在リ而
陽神ハ尤モ旋リ陰神ハ右ニ旋リ分ル巡リ国ニ在リ
同ク會ニ一ツ面ニ

若シ多クあらむのつら異ヲをみあらし

以テ余ノ句ヲ略ス之

五月朔日

川松の扇鼓を捨てて扇のあはれ

あらむのつら異ヲをみあらし

二日

蚰蜒の懈をよめる

三日

百

乾鯨有感

寝喰りめふ丘體 鯨もく佛もく

四日

餅喰りめ目出な 楯のちり世もふ

我ぬちるよふく かくるは
すつて世の有は 處ありあふ
いのちの目を せめていかに
あれよはを せめていかに

点筆めあへん 夕な 夕な 夕な

五日

去るまの 鼻目 時をわかれ
太し構り 世子 又あつて
悼 せめて

雪折り乃 後りと 在り 憾竿

草筆 籠

玉氷の あやめを ちる 月ひかり

六日

菖蒲湯 不 時香乃 活よ ぬ地も

百歩

七日

探題

雨 靜
白星 麻衣

夕露や泣けりけりや門の雨

八日

海へはるかなる磯の夕法師

九日

短夜

橋わたりの三ッハ思案や夏比日

十日

雨意

はたしの白くえ造る芭蕉か

十一日

月やあゝ地まやむしうといふ
哥のらうし業平の讃宜まもり
不重

水あけのむらみぬまき月

十二日

芭蕉翁像前

朝夕の懐ものりゝゝゝゝゝゝゝ

十三日

朝おの床よ曉囃乃言嘲を恒
越よすそびれの小盗人此曲
あつすまのあも隣乃茶灌提り
とひつこちあむおとひも洗濯
あつあつしり所奉行様の是を
捕をちあそよとりの又債より

あつあつの蚤乃多りよ毎日
干ももえれもあつあつと女
腹あつあつとあつあつ勝との
あつあつも真あり

登々志人の盗人の捕をたそ

十四日

一兆亭

志人しとひ登りのいれ昔浦

十五日

雪の戸を柳すうし夕涼

十六日

世情

重箱子 瓶のうしや一夜酒

十七日

平州の雪川公深川祝阿弥寮
宵よりの涼を枕の平 宿在

うふげ海を氷室に下すみ

其日ハ易難標をさきて
四吟ノ哥仙あり

十八日

要津 寺の堂乃棟ま胸を
いふる時多のいさか暗るを
小僧もお平のりまき并に
あつなふ死乃縁無量乃
けりひを翫ん妻らふらふら
哀よあひいふさ翁のあふり
啼風情あり 納所 坊 黒焼

よあしは疵瘡の茶ありて
門あの子供よかありあるも
又き。具夜をた百千返り
りんハ

黒蛇の毒や喰ふん家もた

十九日

詣驪山 同行尼孫

作離らの男らひや若極

粟餘名物あり

正日西ありく百子五月が

廿日

桂廬止宿

うんくも新 櫛の匂ひあり

廿一日

船柁よ業内せられ芝浦菜町の
橋よ登る迄を浦くすの獵船
け橋のもろよ漕をせしひらくあり
ら後目さむるこちす中も
鮮きまのを危しんもはるれ
りり

あらしの心鍋の湯や夏はりか

廿二日

時泊る老のちもかま羽織

廿三日

探題 砂糺をとりよる

上 薦ハ砂糺を水へ入れり

廿四日

桂例判者披露方句與行

ちあうぐれぬ夏こし 至れ枇杷の包

廿五日

先師忌日

己くちあふよ夏の帯衣とあつた

廿六日

水神祭

川蕘の酒流りのあ神楽

探題

宇治殿乃足投りゆつ竹婦人

廿七日

君魚亭

うら水や石いろしの夏氷

廿八日

阿部

虎う雨其の石もねえりへし

席う石の大磯のちまをけりあり
候も恋慕のふあるものよハ
ありけとて身婦のおひひ
重し夫石よあつめ蓮

廿九日

蟬をけり候

い初と蟬をけり候

候のあつた葉のふりけり

いつうく上よふあは蠅叩

六月一日

善林西むつと五すころろ

厚氷を焼くをめてい

汗せうの少室使の若流

二日

六月の海も吐く人百合花

三日

寺院

採蓮のお僧すゝや玉禪

四日

花前

何とあう秋風遠き柳の事

五日

筑前の春江子中 四とせ
あり乃面をあらせ

すりしや先かゝるひよ生の松

探題

夕立や先鞭うらの伊駒山

六日

又通

熟丸百入一袋は種か遠路
之度厚く有り海層中
名産物別々他は海産物
庵中 線石 女 女 女 女
い 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一

有菟椽

池水子 少室つらん次一瓜

七日

都の風情をいふかたし

古葉傳 祇園林や日傘

八日

盗人の納涼をいふ歌ありて

松り枝子 女のんあゝや夕涼

九日

四ッ谷三蘭定省菴みく

百歩

御茶

額 困の二字

小堀權十郎殿筆

初座

掛物

江月一行物

普化振鈴

明頭来也明頭亦
暗頭来也暗頭亦

香合

時代蒔繪

炭斗

物

羽帚

野唇

花入
座

七宝 毛白蓮

水指

青磁足附

茶碗

熱川

茶入

古灰戸口元

中次

盛阿弥

重茶碗

新信乐

翻

會席

向

いり酒 鮎細化
白瓦

平
すりき

飯

汁
あま

焼あ

塩鱒
せんそ

口さり

せし丹

吸物

干葱
茗荷子

香あ

茄子

菓子

つみやうりん

惣菓子

煎餅
水さり

客組

葵太 秦 三 駱 完本

け日夏き忘るよぬさり

十日

松月ノ夏あそき金乃沙うふ

骨髄ノ青水無乃のそをさり

十一日

一燈法師三山呪礼節別

月山ノ杖も瓶よあつ氷

十二日

あろきの胃ヨツテノ透る涼うふ

十三日

或ちりり抱へてあし百蓮を
撰る中り

あよ書て盗人すり蓮花
蓮花してん乃澄泥にすれり
笙涼し遠子葦の葉も舟

十四日

糸魚拂

人凡奉納 日暮里神前よかいて

帆乃んや實も人凡橋が吏中
通車かのののすむ曙吐月
旅衣をたきく春暮れ蓼太
久う漣をとりり中
踏石平表衣傷つ四ツ月
金魚ころよ瀬のうけ太
星々をそし宿存の霞の中
かろりうかきも葛の細た月

不食する茶のひやう法螺の貝 太
 中 へて積めてくすくすのう
 中 泣先もむすの地蔵を誦あひ
 太 冬はしりしり原の浦
 中 移轉して所を寺のち紅葉
 中 禁酒とてしりしり樽籠る
 太 中 絶むしりの短氣おけお
 中 糸魚かりしと史記大傳

昼あうしりよと然る所の月 月
 太 野々按復の清水のあす
 中 うす帯しとすの放馬
 月 け日を曠る翳矢不入
 太 花のあふよ花不笑ん
 中 水口ある堰の板橋
 月 木曾を出ては暁又炭駕
 太 膝くかくはむ大和本料

嬰兒の留まるる風車
所門徒宗の庫裏の存裏
近及の改りぬ高足駄
車ありぬ也菖蒲ひと
汲るていそよ茶あ酔醒
夫婦の圍りし松も
禿るやあけし面あふ
豆前翠のまはり
月中太

ニウ
雞も拾み加増のこかれ木
人々結せて白髪忘る
波の月も越え船舟
里まゝに燈籠あはし
粉茶あし袖も雲依れ秋の
公事のかゝる馴古坊士
寝る時に入するあかもの
雪しもの考る室上の水無月
月中太

年号のあらはれ只錢なり
海影くろくさるこ女の敷太
取膳平 飯冷ゆ魚水中
星も賞はれ秋古三味線
干竿くさるる月の紅縮太

右百員ハ吏中かひひ立
いぢの障さるありて止ぬ
友古よりんかーはさすこ
吐月三夏結縁くさるこ
ひりよ

十五日

太正六月十五日沙羅翠兒
くさるひく三吟あはれあり

紅井の曇ちあはれ清水の蔭太
寒くあはれ夏山陰沙羅
唯ひあはれお暮りけし翠兒
月平あはれぬ粥の盛く太
古翠あはれ合せぬ秋の風 羅

柳の葉をきてておはせしは
 家のこの不徳の田面敷なり
 大の男はやみ眼り申る
 逗留のあふ川京へた若丸
 新めを拾ふ目録の金
 粟齋の青菴髻髪や夏水
 みりの癖くかも瘦の君
 孫院經より書きよき
 太兄羅 太兄羅 太兄羅 太兄羅

十

柳の葉をきてておはせしは
 六十より花の嬰兒よりけり
 舟より海峯川を夕日來
 新れあつての鼓申しよ
 所祝の申さるる邊のよ
 源の内侍と申さるるよ
 極梨の造酒の所
 太兄羅 太兄羅 太兄羅 太兄羅

炭の火をのこし屏風倒る
流るる衣袂を徒者たごと
ぬのいで星よ夜半の暗さ
生る世よ二所の渡唐此舟で
餅や夫婦此息がく働く
我らよと錦よ包む寄進石
蛇りけをく竹のたもせ
焼米此りきり八咫の菴
羅太兄羅太兄羅太兄

ナウ
月よもひよ義之の骨髓
袖袂綾の裕のめ古し
医師より解れ謎の
庚申の虫や雨とぞ
鍋より煉あるは萱の宿
滝を此志るは子都の中
夕日よちち守笠の山吹
兄羅太兄羅太兄

満尾

十六日

始り許りの一里をたると

十六日又嘉定使のせまり

十七日

夏夜下より縫せし袋うさ

三河國所馬湊この所は年々歳
八十三歳此翁の故主なりあはれひ
玉ひて扶お賜り 是る
賀あ こと彼老人の申あり

十八日

涼し風ゆるみよあぐ松二本

子供と抱ひて

うつかりよ虫追する團子

十九日

葛水巾隣あをせ下秋

廿日

憐座頭

百

七六

盲の按摩の笛も致さる

廿一日

信州 玉芝七十歳より薙髪
しる四十余より更を
買し

又是ものゝ窓もあらず

ひ老んて四十の衆より三十六の衆を
志すの眼力すやうの俳諧ハ珪琳
門人あり

廿二日

不悉茶店より雨を凌ぐ

暮志ち 玉階の雨の蓮のふ

廿三日

雪中の芭蕉を画する文墨
句をよき

おのゝ葉へ繪よやく雪の芭蕉

廿四日

夜中雷雨

たせな葉や裂く氷立の乾り

廿五日

百寿

七二

清師八

西国夜講 三目志

あつと東や孔明池を祈れ

北六日

夕飯涼蕙より池を買して

北七日

夏虫入火

櫛潜る糸燭うつりて入敷

北八日

西国指上 放亀狂あり

物くをく亀はうさ後の世ありふ

若きる買して老る賣るあり

北九日

朝夕ありあつても構のお橋
やうりて孫の速きまも亦あり

夏の日は三夜は進み飯飯子

三十日

其牛子百をりらあひく大橋を
西国まて川面吹かす

みり兒北より川即後川

七月朔日

園中二句

雲の飛啼涼ははの秋
秋池北貝割とむる菜畑

二日

亀戸天神と詣

當社の神室天国の所叙は
早魁粟の為六月廿四日別當の
終て東正三の放放とる忽雷雨田

圃を洗ふ實神徳ありとも恐る
かありく廿五日ありともかの靈室
淨をゆるちる系諸群集湯
作の頭を傳はらひて

天國の二字を句中に置く

雨をくし田をよむ稲の穂
廊殿の氷くちる心よの秋
聖廟所自筆神像

繪とあらうくハ神姿

押宮ありし身を御連立の時
御床よりけりて神像を
天下二幅の御影あり

三日

後園

乾教の古よ這よと葦のつ

四日

閑夜

束のぬ芭蕉のくく三三

五日

去るあつ糖のけりあまし

六日

紅脂とらありのあつちや
つげとらありのあつちや

あつちやあつちや君の風仙

七日

星祭

首のる此名よと立れ灯書

八日

比叵のわ倉よ完事とあきり
茶店くぬ編さりのり

あすの蓮く飯喰ふお好

九日

浴何し七十賀所望

七のあや星くぬあよ屯の都

十日

海山観る四万六千日

十一日

木魁か人さくおよび芥子く脚

中洲の花火ハをせを花の垣然
より空よ映し玉奎と譽の
色くぬあやまらぬまらつしあ
やあゆのぬくちあめしむ暗
虫の多そとらあめあきあき
はれ世のしり名をぬあ利を
あきあき又是はぬらり
譽るるまはぬあきあき花火ハ

無常—迅速

露のもやみ嵐の火を待たる

十二日

果の形背くいとや草を売賣

十三日

帆經や麻の衣に帆をあげて

十四日

ころもあそびおれ玉の緒を野おの
りまきりけりる陽昔り秋總

水もさく

塊玉を今宵鋪居はき

寝るこの猿寝も
吐月と巢信夫魚久等塊を
ひくるさそ

玉の形をの 刺草花

十五日

沙羅岸亭と隅田川を遊ぶ

せりふれや虫はぬみ物語

白 髭

志ひけりて安んずる専らせん秋の暮

十六日

高田の母下へ道におもひを盡す

十七日

大塚屋敷へ可賀前へお侍
前裁を志すていふ家おこし

朝のや基依の質も戻るへし

十八日

来し石子堀ありきりく

十九日

雨静と行徳徳願寺上人を
降し来むと母をいふ

水すし 秋澄園のありきり

徳願寺

上人下り湯へ来れ先十念を
換けぬひて法話や志す感候哉

催したる薄暮せきの寂莫
いそんりこふ

念佛の念も泣かぬ朝の暮

遠くはありし近極楽

上人の所服は丸をまゐる心
いそん是を一夏百句の湯
かして筆をぬぐふ

遺稿

春の部

湧江舎

葵山

木と井もくめを連理り所鄰
雪消ぬ里を志る柳のふ
志る尾の鷲も下枝く柳の
日ハ海より今るやうあはれ風

光りたる海苔ころの春戸の日向の
曇るや花ころりて朝の色
しるもの一好い花をくれり
尼寺の木の花のりりり
暁やま白牛一暗し山橋
月うけりる花に送る花
ある朝をりる出る朝の
まな花やあめして大和川

夏の部

牽て行大名町下かき
子知通夜の芽をりる

病中一此吟

起りたるつきお草や雨の跡
癒るるを物胸の毒も哀あり
曇るや人馴るより老の色
早しずの笠あひたる堤のふ

らみよぬや片し 白き磯の波
あもも兼てこおる竹つ螢か
涼りる来ませ三日月の照
みちの連とありつり 岩清水

秋の歌

秋風の送るそら 寝るあふ
稲妻の志きりく 落る人は
鳴るよと立ちあがりうら

廣くは慰あき 田の来きか
白嶺へ何おもを ぬりく 秋の暮
久北郊

夕島雨の空し のらこり
あふりあしり 音を 小夜歌
笛を守る神つ所 住連や枯所
その音や柳のこるる 小南
放るるまも 今秋の音

下駄を履く車は猶漸鈍打
す掃や日向く先の主居客居
節季山やりの市の小買物

花車人かなすろを

あゝの音

跋

百廢すん百中いりをもと
先師く百歩の吟ありと我
日記せしものく梓行のゆたも
及りりをもこゝの卯齋亭主人
是をんて橋本まのする
おろしき予の志はあはれせよ

百歩

跋

百の辞をいふるを教り
しりて流筆を執るを
志ありし

三芥子

白麻

天明丁未中秋



丁未

秋

三芥子

白麻

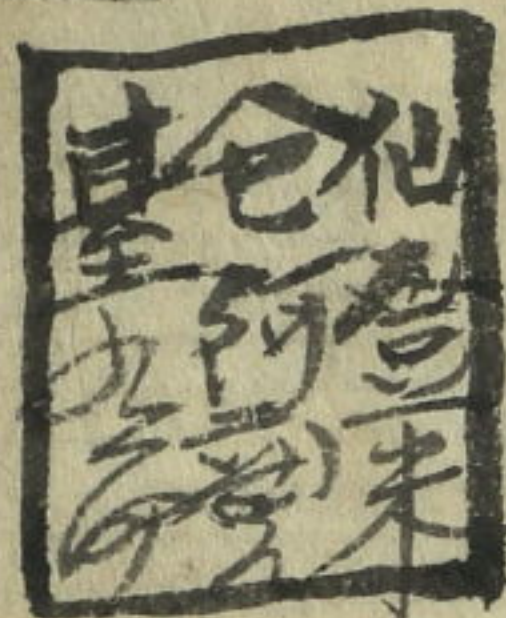
三芥子

白麻

三芥子

三芥子

三芥子





千葉

一葉